



♡♡♡②

米・ロサンゼルス
6年在住体験
平木 博美

救急車が事故現場を離れてすぐ、点滴の準備が始まったが、香織の血管が探し当てられない。針を何度も刺すので痛がる。頭は大きく割れているが、事故後一度も気を失っていないし、今これだけ意識がはっきりしていれば、命は助かる可能性が高いという。頭が割れず、内出血するのが一番命の危険性が高いらしい。大量出血で気が動転していた私も、理論的な説明を受け、救急隊員の指示がよく理解できるようになってきた。二十分ほど走ると車が止まり、ヘリ救急隊員が乗り込んできて、指示を出し始める。この隊員は、医療行為まで行う資格を持つ

頭が大きく割れ出血多量

娘に必死で話しかけ失神防ぐ



事故3日前、平木さんと記念撮影した香織ちゃん(当時6歳)

ているパラメディックと呼ばれる救急隊員だったのだ。事故後、すぐに医療行為を始めると、生存率は高くなるのは自明の理だ。香織が気を失うと内出血

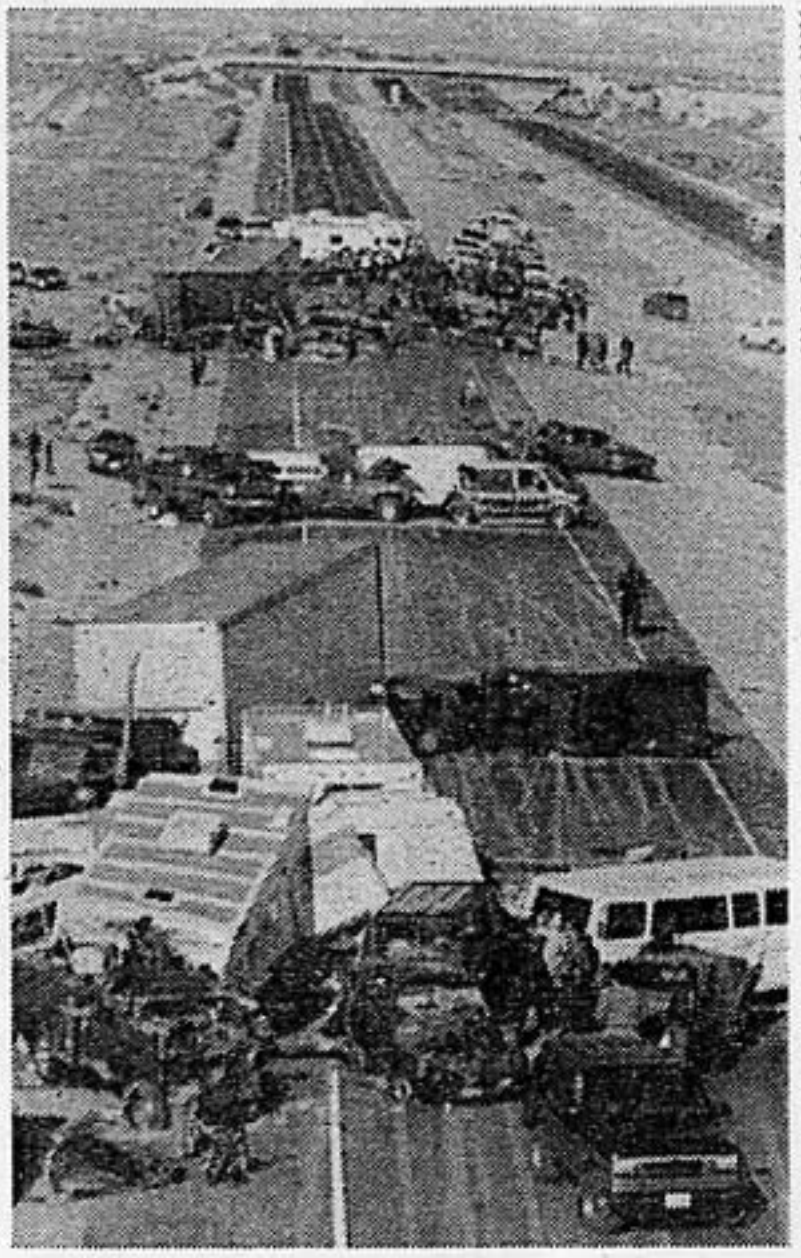
重傷の患者をそっちのけでおしゃべりに忙しい看護婦 祈るほかなすすべなく

起きこし、生存は保証できないと言われ、話しかけ続ける。約一時間走ってようやく病院に着く。先刻、帰途につくため出発した町へ逆戻りしたのだ。救急室に担ぎ込まれると、すぐ大量の書類が出され、署名するようになされる。署名しないと処置ができないのだ。骨折でもしたのかと思うほど痛みが右手にあるが、左手で支えながら署名する。これで手当てをしてくれると安心したのもつかの間、宿直医が現れ、休日での病院で手術はできないので、ラスベガスまで飛行機で行けと言った。

当としてくれ、と頼み込む。宿直医は、私たちの家の隣町から週末のアルバイトに来ていた男で、スタッフを集めることに何とか合意してくれた。看護婦たちは、おしゃべりに忙しく、香織の外傷を消毒し、髪の毛を手術のためにそっただけでほろりっ放し。私はなすすべなく、いすに座っていた。

主人と子供たちは、無線で警官が呼んでくれた救急車で病院に着き、外傷の手当てを受けた。香織以外は軽傷だ。私も右腕の痛みが激しいので、レントゲンを撮ってもらうが骨に異常はないとのこと。打撲かと納得する。結局、腕の筋肉を切断していることがわかったのは一か月後のことだった。病院に着いて五時間はたっただろう。香織の傷口の血も止まってしまったところ、手術の準備ができたこと知らされる。あまりの悠長さで怒りもない状態だった。ラスベガスに転院しないですんだことだけを感謝し、運を天にまかせて、香織を手術室に送り出す。ベッドで運ばれて行く香織の頭の頂の星形の傷が、目に焼きついて離れなかった。研太郎は、顔面にはけもあり、頭部打撲もあるかもしれないため、入院することになり、主人は英理子を抱え、歩いて行ける宿を手配してもらって、そちらへ向かう。私は、研太郎の寝顔を見つつ、病室で手術のすむのを待つことになった。両ひざも骨が見えるほどの傷があったので、足がもう動かなくなるかも、と心配したりしながら、命だけは、と祈った。

米カリフォルニアのハイウェイで砂あらしのため
百台以上が玉突き衝突した現場「ロイター」



監修
小木曾道子